京都大学	博士（地域研究）	氏名	紺屋　あかり
論文題目	現代パラオ社会における詠唱実践		

（論文内容の要旨）

本博士学位申請論文は、ミクロネシアのパラオ共和国において実施した通算23ヶ月のフィールドワークに基づいて、口承伝承を「詠う」という表象行為がもつ社会的意味合いと、その編成過程について明らかにすることを目的とした。

第一章「序論」では、本研究の背景と目的を示した。口承伝承の対象とした従来の人類学的研究においては、人びとの語りを文字化して歴史を再構築する歴史学的アプローチや、神話の身体化・具現化表象の過程に焦点をあてた芸術学的アプローチが中心とされてきた。それら既存研究において分析対象となる語り手や表象者は、首長などのエリート層や芸術家など特定の人物に限定される傾向がつよかった。それに対して本論文では、より多くの人が参与する詠唱という表象形態に焦点をあてることで、個々人が自己の経験や社会関係に立脚して日常生活においてどのように表象の場をつくりだしているのかについて明らかにすること目的とした。

第二章「地域の概要と調査手法」では、パラオの歴史的背景と調査手法を示した。19世紀以降の四カ国からの植民地期、独立に向けた国民国家形成期、そして独立以後の近代国家としてのスタートといったためまぐるしい社会変動を描写し、パラオの人びとがいかに他者と向き合いながら自律の道を模索してきたのかについて指摘した。調査手法については、五名の詠唱家から収集した詠唱詞と作業方法、悉皆調査を実施したA州の概要、参与観察を行った詠唱事例を示した。

第三章「詠唱とは何か」では、詠唱を「民族音楽」から「語りの一形態」へと捉え直すことを試みた。パラオの詠唱に関する従来の民族音楽学研究においては、音楽/非音楽と二分された機能の総体として詠唱が捉えられてきた。またその分類レベルは旋律を基準とするものであった。それに対して本論文では二項対立的な見方を脱却するため、詠われる口承伝承の内容から詠唱を区分した。そして、①出自集団内で継承・実践される秘伝性を帯びた詠唱、②特定の土地（村落）との帰属関係をもつ詠唱、③島全土に共有される詠唱という三つの異なる特性を指摘した。さらに、詠唱詞の隠喩表現や詠唱形態を分析することでパラオの詠唱実践の全体像を示した。

第四章「詠唱の編成過程」では、詠唱を生成する政治的イデオロギーとその編成過程を検討した。元来中央政権を有さず、平等制と階層制が混在したパラオの首長制に基づく流動的かつ競争の社会において、口承伝承が島全体に共有される唯一の価値基準であったことを指摘し、口承伝承を「詠う」という表象行為と政治的イデオロギーとの関係性を位置づけた。

第五章「詠唱をめぐるポリティクス」では、現代における詠唱詞の継承事例と実践事例を分析・記述した。従来の人類学的研究においては「知識＝力」という口承伝承の知的体系が指摘されてきたが、現在の詠唱をめぐる状況に関していえば、伝統的称号をもたないインフォーマルリーダーが担い手となっている傾向を明らかにした。また、特定の土地へ帰属す

る詠唱詞が水面下では親族・村落関係を跨いで継承されている状況についても明らかにした。このことから、詠唱を通じては「知識＝力」といった口承伝承をめぐる知的体系に準じた親族・村落内序列の遂行的な実践としてだけでなく、より開かれた社会関係のもと自発的・積極的に実践される創造的な実践としての側面が見出されていることを指摘した。

第六章「結論」では、現代のパラオ社会において詠唱を通じた表象の場が繰り返し生み出される現象について検討した。そして、①詠唱が日常的かつ私的・公的なあらゆる場面において実践されることで、パラオの政治文化を構築するローカルなポテンシャルが生成されていること。②詠唱を通じて人と人との対面的な相互行為の場をうみだすことによって、その都度地域社会が再編されていること。③詠唱を通じた表象空間の共有が、今日のパラオ社会が直面するグローバルな社会的・政治的変動に対抗するための装置としても機能していることの三点をもって結論とした。